

教員養成における大学との連携

— 成果と課題 —

北海道立教育研究所附属理科教育センター 次長 木下 温

[キーワード] 教員養成 大学 教科教育法 連携



1 はじめに

北海道立教育研究所附属理科教育センターでは、本道の理科教育の充実・発展に寄与すべく、大学が実施する教員養成課程への非常勤講師の派遣等を行ってきた。1) 本稿では、北海道大学で前期に実施した教科教育法(理科I)総論のアンケート結果の分析を中心に、教員養成における大学との連携についての成果と課題を述べる。

2 大学の教員養成課程への非常勤講師の派遣について

本道の理科教育の充実・発展のために、理科教員の養成は重要である。当センターでは、今年度、大学の講師派遣要請を受けて、教職課程の理科教育法における非常勤講師として、3名の職員を道内の3大学(北海道大学、北海道教育大学札幌校、公立千歳科学技術大学)に計15回派遣した。その中で、筆者が担当した、北海道大学の教科教育法(理科教育法I)のアンケート結果の分析を次に述べる。

3 北海道大学の教科教育法(理科I)について

北海道大学の教科教育法(理科I)は中学校・高等学校の理科教員免許状取得のための教職課程科目であり、ガイダンス(1回)、総論(5回)、各論

(物理・化学・生物・地学各2回)、試験(1回)で計画された。筆者は、総論を担当し、68名の学生(学部2年次～修士1年次、科目履修生)を対象に大講義室で5回の講義を行った。

各回の講義内容とねらいは、次のとおりである。

○第1回 「学校の現状と教員の仕事」では、各種調査に基づく本道の理科教育の現状と課題を把握させるとともに、教職の具体像を獲得させる。

○第2回 「理科教育に求められているもの」では、法令等の根拠に基づいた学習指導等について理解させる。

○第3回 「理科の授業づくり①」では、学習指導計画に基づいた学習指導計画の作成について理解させる。

○第4回 「理科の授業づくり②」では、学習指導・評価の在り方と工夫について理解させる。

○第5回 「理科の授業づくり③」では、観察・実験等の指導における危機管理と理科教育の近未来の動向について理解させる。

階段式の大講義室で多人数を対象とした講義のため、効果的な観察・実験は断片的紹介にとどめた。講義終盤の振り返りとまとめの時間で、講義(およびその内容)についての質問・意見・要望・感想を記述させる時間を設けて回収・整理して、次回の講義の冒頭

で紹介・質問に対する回答・講義方法の改善を行うことで、講義が学生への一方通行に陥らないように留意した。

4 受講者について

(1) 所属学部・年次の内訳

図1は受講者の所属学部等を、図2は年次をそれぞれ示したものである。所属学部は、理学部と水産学部が約7割を占め、年次は2年次がほとんど(58名/68名)を占めた。

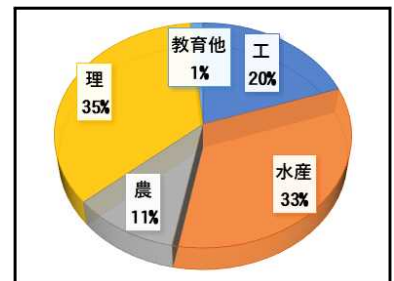


図1 受講者の内訳(学部)

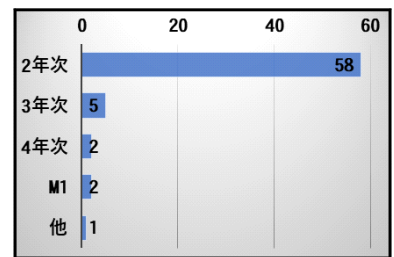


図2 受講者の年次

(2) 受講目的

図3は、受講者の受講目的を示したものである。目的として「教員免許状取得のため」が最も多く、「教師になるため」は17%にとどまった。

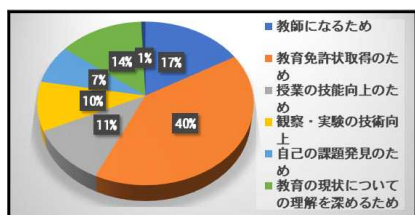


図3 受講目的

(3) 教員志望状況の変化

図4は第1回講義後の教員志望状況を、図5は第5回講義後の教員志望状況をそれぞれ示したものである。

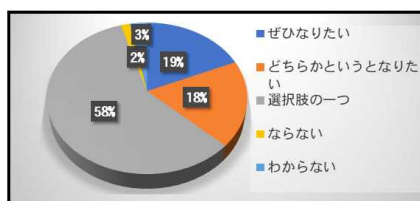


図4 教員志望状況 (第1回)

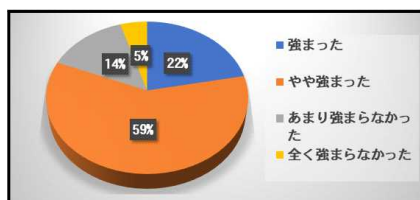


図5 教員志望状況 (第5回)

図4によると、第1回の教員志望状況では、「教員にぜひになりたい」と「教員にどちらかというとなりたい」はそれぞれ約2割であり、最も多かった回答は、「教員は選択肢の一つ」であった。なお、「教師にならない」「わからない」と回答した受講者は、合わせても5%であった。

また、図5によると、第5回の教員志望状況では、「教員志望が強まった」は22%、「やや強まった」は59%で、事後に教員への志望が強化された割合は約8割に達した。教員志望状況は、講義の事前事後の変化だけを見ると、講義前と比較して概ね強化されているといえる。一方、「あまり強まらなかった」と「全く強まらなかった」と回答した受講者は、合わせて約2割を占めた。

(4) その他、受講後の変化

図6は、第5回講義後の教員志望状況以外の5つの項目（①授業へのイメージ、②授業技術、③観察・実験の技能④教育の現状と課題への理解、⑤教職を目指す自己の課題発見）のそれぞれについて、4段階で最も高評価の回答を得た項目の割合を示したものである。

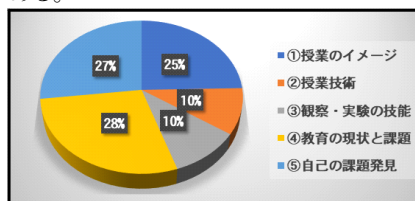


図6 その他、受講後の変化

高評価の割合は、④教育の現状と課題への理解（28%）、⑤教職を目指す自己の課題発見（27%）、①授業へのイメージ（25%）の順に多く、②授業技術（10%）、③観察・実験の技能（10%）の評価はともに低かった。

5 成果と課題

(1) 成果

受講者の教員志望状況は、講義後に強化されており、アンケートの自由記述欄には、「講義をとおして、教員として働くとはどのようなことかが、より具体的にイメージすることができた。」「学校で教えるとはどういうことか、具体的な内容を網羅的に学び、考えることができた。」

「教職は大変そうだと思っていたが、やりがいすごいことも分かった。以前よりも教職への興味が強まった。」といった記載が見られた。講義をとおして教職への理解と意欲喚起に一定の効果があったと考えられる。

(2) 課題

受講者の約2割は、講義の前後で教員志望の強化がほとんど見られなかった。アンケートの自由記述欄には、「教職の使命とともに想像以上に大変なことがよく分かった。」「評価など求められることが多く、自分には難しいと感じた。」といった記載が見られ、教職を取り巻く環境の厳しさや教職の資質・能力についての不安が多かったことから、教職への魅力と教職に求められるスキルを具体的に伝えていく努力はいっそう必要である。

また、多人数の受講者を大講義室で一斉講義したため、授業技術や個々の観察・実験の技能について、具体性の乏しい場面が多く、「普通の授業のやり方とおして具体的に教えて欲しい」という声にも応える必要がある。

6 おわりに

本道の理科教育の充実・発展のために意欲あふれる理科教員を養成することはきわめて重要である。当センター職員による講義は、志望動機が定まっていない受講者への教職の意欲喚起に有効であると考えられる。今後、教職の正確な情報とともに本道の教職を共に担う人材育成に繋がるよう、より実践的な講義内容・方法となるよう改善・充実が必要である。

参考文献

1) 教員養成における大学との連携とその成果と課題 (1) 北海道立教育研究所附属理科教育センター研究紀要第22号 2010
(きのした あつし)